

曲目解説

● ダンシン・メガヒッツ

Dancin' Megahits

星出尚志(編曲)

Arr. Takashi Hoshide

世界中で愛されているダンス・ミュージックの中から、星出尚志(b. 1962 ; 日本)が「サンシャイン・デイ」、「タブサンピング」、「サンバ・デ・ジャネイロ」、「シャ・ラ・ラ・ラ」の4曲を組み込んで、メドレーとした。YAMAHAが出版している「New Sounds In Brass」シリーズの1曲。ノリの良い曲なので、舞台を盛り上げるの最適である。

● ディズニー・ファンティリュージョン!

Disney's Fantillusion!

星出尚志(編曲)

Arr. Takashi Hoshide

東京ディズニーランドの夜を飾るパレードで登場する曲を、吹奏楽版にした作品。全ての曲を含めれば理想的なのだが、演奏時間などの事情から、星出尚志(前述)は、「ファンティリュージョン」、「白雪姫」、「アラジン」のみを組み込んで、メドレーとした。それでもパレードを連想させるのに十分なほどである。これもYAMAHAが出版している「New Sounds In Brass」シリーズの1曲。根強い人気のある作品である。

● トリッチ・トラッチ・ポルカ

Polka Tritsch Tratsch

ヨハン・シュトラウス2世

Johann Strauss II / Arr. Alfred Reed

J. シュトラウス2世(1825-1899 ; オーストリア)は、ワルツ王として有名である。「ポルカ」とは、19世紀前半にボヘミア地方に起こった2拍子の軽快な舞曲のことで、この作品は1868年に作曲された。曲名の「トリッチ・トラッチ」には、「おしゃべり」という意味があり、奥様方の井戸端会議の情景を風刺したものらしい。軽快なリズムの楽しい曲。今回演奏する吹奏楽版は、A. リードの編曲で、1998年に出版されたもの。

● 小組曲

Petite Suite

クロード・ドビュッシー

Claude Debussy / Arr. Kazuhiro Morita

C. ドビュッシー(1862-1918; フランス)による作品。元々は1888~1889年にかけてピアノ連弾曲として作曲されたものだが、その内容が素晴らしいため、管弦楽に編曲され、広く知られるようになった。I. 小舟で II. 行列 III. メヌエット IV. バレエの全4楽章から成る。この作品の吹奏楽版はいくつか出版されているが、今回演奏で使用するの、小・中編成向け「Aregro. 1」シリーズに収録された譜面。1998年出版。

● 交響曲第9番「新世界より」第4楽章

From the New World Symphony (Mov. IV)

アントニン・ドヴォルザーク

Antonin Dvorák / Arr. Erik Leidzén

A. ドボルザーク(1841-1904 ; チェコ)は、アメリカの音楽院に教授として招かれ、1892年に祖国を離れて新天地へと旅立った。当時は、南北アメリカは「新世界」と呼ばれ、2年半の滞在期間の初期(1893年)に、この交響曲第9番「新世界より」が作曲された。今回演奏する第4楽章は、この交響曲の終曲で、祖国のボヘミア地方の音楽的要素が盛り込まれた壮大な曲。有名なので聴いたことがある人も多いだろう。

●川の流れるところ
Where the River Flows

ジェームズ・スウェアリンジェン
James Swearingen

J. スウェアリンジェン (b. 1947 ; アメリカ) は、アメリカの大学で音楽教育学部の主任を務めており、中・小編成向けの親しみやすい作品を数多く手掛けている。実はこの作品に関しては、手元に資料がなく、詳しいことは判らないが、スコアによれば、I. The New Frontiera II. Bring Buck My Child III. Great Chief という全3楽章から成る作品である。内容については、聴き手のご想像にお任せしたい。1993年出版。

●詩的間奏曲
Poetic Intermezzo

ジェームズ・バーンズ
James Bernes

J. バーンズ (b. 1949 ; アメリカ) は、カンザス大学で教授を務めており、日本でも人気の高い作曲家の1人。多彩な作風を持つが、A-B-A形式(テンポが急-緩-急と変化する作品)を比較的多く手掛けており、それらの中間部は、いずれも大変美しい旋律で歌われる。これがバーンズの魅力の1つだが、この作品では、そんな魅力的な旋律が、曲全体において展開され、大変美しく叙情感あふれている。1985年出版。

●ファンファーレ・バラード・ジュビリー クロード・スミス
Fanfare, Ballad & Jubilee *Claude T. Smith*

C. T. スミス (1932-1987 ; アメリカ) は、優れた吹奏楽作品を手掛ける作曲家として、日本でも80年代には、その名が定着していた。しかし、更なる活躍が期待された矢先、1987年12月に55才の若さにして他界、彼の死後も、その作品を懐かしむファンも多い。そこまで書いて申し訳ないが、この作品は手元に資料がないので、あまり詳しい解説が出来ない。題名からも想像出来るが、スコアを見たところ「急-緩-急」の3部構成であることが確認出来た。あとは直接演奏を聴いていただきたい。1983年出版。

●ひとつの声に導かれるとき ジェームズ・ホゼイ
And the Multitude with One Voice Spoke *James L. Hosey*

J. L. ホゼイ (b. 1959 ; アメリカ) は、日本では馴染みが薄いですが、優れた吹奏楽作品を手掛けている。この作品は、アメリカの黒人公民権運動の指導者、マーティン・ルーサー・キング牧師 (1929-1968) が、1963年8月に行った有名な演説「私には夢がある」(I have a dream) をきっかけに、抑圧を受けていた人々が立ち上がり、ワシントンに向けて行進する運動が展開されたという実話に基づく。1998年出版の最新作。「過酷な現実」と「未来への希望」をそれぞれ象徴するように、攻撃的なフレーズと美しくロマンティックな響きの対比が印象的な作品。長い道のりの末にたどりつく力強く輝かしいクライマックスは感動的で、この作曲家の持ち味が生かされている。

●闇をさまようもの フランコ・チェザリーニ
The Haunter of the Dark *Franco Cesarini*

F. チェザリーニ (b. 1961 ; スイス) は、吹奏楽に限定されず、管弦楽の作品なども手掛けている。この作品は怪奇小説作家H. P. ラヴクラフト (1890-1937) が1936年に発表した最後の小説「*The Haunter of the Dark*」を題材としている。荒れ果てた古い教会の中で、主人公(作者自身がモデル)が見つけた金属製の箱が、闇に住む邪悪な魔物を呼び寄せてしまうといった内容で、この小説から受けた印象を曲にしたもの。この魔物は光を受けると退散してしまうが、夜中に街全体が停電したのに乗じて古い教会から街へと出てきて、主人公に襲いかかってくる。その結末はぜひ小説を読んで頂きたい。魔物が混乱を引き起こすシーンとなど、激しい部分の多い曲だが、最後は静かに終わる。「何かが潜んでいそうな」不安な音も響くが… 1995年出版。